

下二、御使番、兩御番與頭、御徒頭、小十人頭列居、老中若年寄中退出之節、御祝儀申上之、御目付、
新御番頭者、中之間著座、桔梗之間、新御番組頭、御番醫師伺公、

一御祝之大豆升ニ入、御賄方之者持出之、伺公之面々於席々頂戴之、

〔幕朝年中行事歌合〕中三十四番 右 節分

冬と春と行かふ道の誰かれも迷はでのぼるとの、うちかな略○中

節分と申は、立春の前の夜、儼をやらひ豆をまく事、都鄙みなおなじ、黄昏の頃、年男の老臣長ば
かま、其餘の宿老少老は、熨斗目半袴にて出仕あり、奥のおまし所に豆を置き、執參の人々も歡
をのべらるゝにやあらん、此夜宿老小老の外は、別に出仕するにいたらず、

〔内安録〕一恭廟

○徳川家齊

御時、御膳所御臺所より、節分の夜、御吸物に白魚を調じ奉るは、いか成譯か

と思ひしに、禁裏附となりて、節分の夜に内侍所へ警固上げに廻りければ、定式白魚の吸物、地紙
形白木の硯蓋に松の枝を立て、肴品々を盛りたるを出し、行事官と武家附と盃事をする定例也、
さすれば節分に白魚の吸物といふ事は、古く京にも江戸にも用ゆるものなるべし、

〔日次紀事〕十二月

此日分

節 御泥池良隅中村貴布禰社祭、相傳、寛平年中疫癘盛行、依神託而此處勸

請貴布禰神、今夜昇神輿而巡池邊、其後入豆於升、而撤四方追疫鬼、予今在豆塚升塚之名、豆塚或作
魔滅塚、貴布禰奥院所祭素盞鳴神也、宜哉殺疫鬼也、

〔俳諧歲時記〕正月 女節分日十九

是も吉田の疫神詣也、前にいへるが如く、節分の夜より、疫神を祭

るがゆゑに、男子は節分の夜といへども參詣すれども、女子は時分の家事にいとまなく、特に夜
中にまふすることあたはず、この日を以、節分のかはりに詣するこゝろにていふ歟、京の婦女正
月十五日を年始のはじめとして、女正月といふたぐひにや、

〔鹽尻九〕一駿府に住し者かたりしは、府中の十二月節分の日、暮前より市井菰をおろし、あるじ